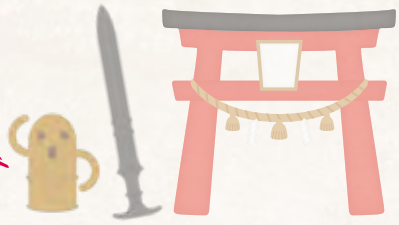
むかしむかし
昔々のそお市
郷土を知る

社会教育課 文化財係 ☎ 099-482-5958



第3回

中岳洞穴の発見

中岳洞穴は入口高約1.5ｍ、間口高約６ｍ、奥行き約60ｍの自然洞穴を住居として利用した洞穴遺跡です。昭和44年に現地調査を行い、縄文時代晩期の土器を採集、その後昭和53～54年に本格的な発掘調査を行いました。

調査の成果として、出土遺物より縄文時代後期から晩期（約４０００年前から約２３００年前）にかけて利用されていたことが判明しました。洞穴間口付近からは炉の跡が検出し、そこを中心に遺物が出土しています。

出土した土器は日本初の全く新しい形の土器で、遺跡の名前を取って「中岳式土器」と命名され、南九州の縄文時代後期の土器として考古学研究に大きな成果を挙げています。

日常使用する土器や石器の他に、出土した遺物には、当時の人たちの食生活の様子がうかがえるものがあります。イノシシやシカといった大型の動物や、タヌキ、アナグマ、ウサギ、ムササビ、サル、キジなどの小型の動物や鳥類の骨も大量に見つかっています。また海から遠く離れた場所にもかかわらず、ハマグリやサルボウといった貝殻も出土しています。

骨を加工したカンザシや、貝殻に刃を施した貝刃（かいじん）といったものも出土しており、当時の人たちの技術の高さや素材を大切に活かす工夫がうかがえます。

中岳洞穴の近くには、花房洞穴や県境にも尾平野洞穴といった、自然にできた洞穴を利用した生活の跡が見つかっています。南之郷一帯のみならず、曽於市内の山間部には、まだ確認されていない洞穴遺跡の可能性が十分にあります。

遺物は末吉歴史民俗資料館に展示しています

【アクセス】
垂水南之郷線（71号線）から平沢津地区をぬけ、中岳ダム方向へ。岩戸橋付近に洞穴の案内看板あり。橋から50ｍほど山中に入ったところ。

※注意　洞穴内は危険なので立入はご遠慮ください。

曽於市HP内「中岳洞穴」で検索